



35

ゴルフで社会課題を解決
～医療知識を有するスタッフがもたらす可能性～

ゴルフ × ヘルスケア の 多様な可能性



小森 剛 | こもり・つよし

1964年生まれ。〈有〉ゴルフハウス湖南の代表。「ゴルフと健康との融合」がテーマのゴルフスクールを神奈川県で6校運営する。自らゴルフレッスンを行う他、執筆や講演活動も行う。日本ゴルフジャーナリスト協会理事。著書に『仕事ができる人はなぜ、ゴルフがうまいのか?』がある。ビジネス情報サイト「Biz Clip」に連載公開中。一般社団法人日本健康ゴルフ共創機構代表理事。

じて仲間や楽しみを持ち続け、なりたい自分・ありたい自分、でいられるためには、持病や大病の既往歴があっても、安心安全にゴルフが楽しめる環境整備が不可欠です。そのことで、先の社会課題から多くのゴルフ愛好家を救えるはずです。

そのための具体策は、ある程度の医療知識を有するスタッフを育成してゴルフ場に配置。提携する医療機関と連携し、適切な指導を行う、高齢ゴルフの健康を見守ることが、ゴルフ×医療連携の実現。そのために必要なのが、ゴルフ



(図1)医師監修の運動プログラムを提供する「Doctor's Fitness」
(写真提供:株式会社 Doctor's Fitness)



(図2)運動指導者のための医学・医療の学び場
「Doctor's Fitness Academy」の修了証

活動慣病や循環器疾患、健康診断結果の見方や医療連携の方法、更に自律神経や睡眠、戦略的リハビリ等を医学的に学びます。筆者は「ゴルフ×医療連携」を実現する上で、まず自分が率先して学ぶべきと考えて同アカデミーの門を叩きました。そして全10回コースを無事修了することが出来ました。(図2)

宮崎先生によれば、イギリスやオランダ等の先進国では「社会的処方」という概念が広まっているとか。医師が単独だけでなく、運動や社会参加活動も処方するという考え方です。ゴルフ×医療連携が進むと、「ゴルフ処方」が広く認知される時代が来るかも知れません。

日本は5人に1人が75歳以上の後期高齢者に、3人に1人が65歳以上という超高齢社会です。このことはメガタイプに投じられがちですが、実は日本の医療技術の進歩の賜物なのです。より多くの国民が高齢な医療の恩恵で生き生き出来るようになったわけで、とても良いことです。

その反面、社会の仕組みがそれに追いつかず、社会保障費の逼迫など様々な歪みが生じています。

ゴルフで社会課題を解決

高齢化による社会の歪みの一つに、高齢者の運転免許返納による交通弱

題です。筆者が主催するゴルフスクールでも、親の介護を理由に迫られる方が増えています。

これらの社会課題をゴルフで解決できないでしょうか。例えば、交通弱者救済に多くのゴルフ場が保有しているクラブパスを活用するのはどうでしょう。地域のいくつかのゴルフ場が協力し、自治体と連携してクラブパスを地域のシャトルパスとして活用するというアイデアです。

交通機関が発達している都心部はともかく、地方ほど交通弱者の問題は深刻です。その一方で地方はゴルフ場は多いため、ゴルフ場のクラブ

パスが近所の公園のように身近になり、ゴルフをはじめてみようとする人も増えるでしょう。

ゴルフ場が地域の社会課題を解決するために不可欠なインフラに脱変(注2)すれば、自治体も地域の住民もゴルフ場をえてくれ、ゴルフ市場は活性化します。

ゴルフ×医療連携の第一歩

医療技術の進歩により国民が長生きできるようになった一方、核家族化により独居の高齢者が増え、孤独や不安、生きがいの喪失といった課題も顕著です。このような社会課題

(注1)ワーキングプア層はながら家族などを介護する人。ビジネスケアとも。高齢化と共働き世帯の増加により日本でも増加。身体的・精神的な負担の大きさを、介護報酬につながるケースが社会問題となっている。

(注2)脱変(だいはん)時代のことに合わせて、企業がサービス内容や形態、業態を変化させていくこと。本来の意味は、昆虫が卵から幼虫、蛹(むすずめ)、そして成虫へと成長するにつれて姿かたちを変えていく。企業の成長に伴う成長になぞらえて脱変と表現。